
エイリアの子供達（仮）

烏丸はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エイリアの子供達（仮）

【Nコード】

N37600

【作者名】

烏丸はるか

【あらすじ】

エイリア学園小説を徒然と気まぐれな長さで。

話がどう転がるか分からないので一応ボーイスラブタグ付けておくけどあっても多分少なめ。

今のところそう言う気配は無い。

この小説には高濃度の妄想が含まれています。ご了承ください。

孤児としてお日さま園へ引き取られた子供達が“宇宙人”として生きる事を強いられて行く過程と、『エイリア学園』と言う狭い箱庭

の中で終焉へと向かって繰り広げている日常の物語。
オムニバスストーリー。

名付けられた葉―گران―（前書き）

昔の名前はもう忘れてしまった。
だって、愛されたかったから。

名付けられた葉——格蘭——

「ヒロト」

男は僕を見るなりそう呼んだ。

「ひろと？」

訳が分からずキョトンとしていると、彼は身体を震わせながら僕を抱きしめて『ヒロト』の名前を呼び続けた。

（もしかして僕のことを呼んでるの？ でも、僕はヒロトじゃない）

知らない名前で呼ばれて面白くはなかったが、何故かその腕から逃げ出す気にはならなかった。

幼い僕でも彼が抱くどうしようもない喪失感が痛いほど解ったから。

僕と同じ、二度と会えない誰かを諦めきれない。

気が付けば反射的に自分を抱く腕、身体を抱き返していた。

身代わりと解っていてなお、その腕は拒むには暖かすぎたのだ。

それほどにも僕はぬくもりに飢えていたんだ。

だから僕は——ヒロトになった。

（はっ）

不意に目を覚ました格蘭は、飛び起きて周囲を見回す。

薄暗い中目を凝らすと、そこには見慣れた自室の風景が広がっていた。

（夢か それも、随分昔の夢を見たな）

お日様園に来たばかりの頃の夢。お父様に初めて会った時の。

どうして急にこんな夢を見たんだろう？

どんよりとした頭を掻き篁りながら思いを巡らしてみる。

——ああそうか。昨夜は瞳子姉さんが居なくなっただ日から丁度5年だったっけ。

湧き上がる言いようの無い寂しさに思わず苦笑する。
何年たつてもこの喪失感に慣れられそうにはない。

そう、5年前。お父様のやり方について行けなくなった瞳子姉さんは、僕らを置いて姿を消した。

誰にも何も言わずに。

優しい彼女にお父様の提唱するエイリアの方針は耐えきれなかったのだろう。

仕方が無い事だった。解ってる。みんな分かっている。
だけど、やっぱり思わずにはいられなかった。

（また捨てられた――）

愛する者に置いて行かれるトラウマを抱く僕らエイリアの子供としてそれは耐えがたい出来事だったと言えよう。

ほとんどの子供が泣いたし怒ったし、表面上は平静を保っていた僕でさえ動揺を隠しきるのに苦労したのを憶えている。

それでも、誰一人として彼女を悪く言う人はいなかった。

何故ならば先に彼女を捨てたのは僕達だと誰もが分かっていたから。

お父様の愛が欲しくてエイリアと言う力を受け入れた僕達に瞳子姉さんを責める資格は無かった。

そして僕は、俺達は――もう一度名前（過去）を捨てた。

瞳子姉さんを失った哀しみを封印し、もっとお父様に愛してもらえるように。

そう、俺は“グラン”。吉良ヒロトでも基山ヒロトでもない。

エイリア学園マスターランクチーム『ガイア』のキャプテン、グランだ。

我、力（偽り）を求めたり。――レーゼ――（前書き）

俺はただ、ヒロトとサッカーがしたかったただだった。

我、力（偽り）を求めたり。――レーゼ――

初めてその石に触れた時、これこそが自分の求めるモノだと確信した気分になった。

実際は肉体強化作用と同様石に精神力をも増幅された結果にだったのだが、元の劣等感が強ければ強いほど使用時の万能感は大きかった。

手放せなくなるほどに。

まさに悪魔の囁きと言うのはああ言う事を言うのだろう。

『エイリア石』とはそういう石だった。

ジエネシス計画が発足し、エイリアの子供達がサッカーを始めたばかりの頃。

俺、緑川リュウジは誰よりもか弱くサッカーも下手だった。

どのくらい下手かと言うと、他の子供達がチームを組んで試合をしていた頃もグラウンドの隅で基礎練習をしていたくらいだった。

いつものように地面に描いたボールに向かってキックの練習しているとボールが飛んで来るのが見え、リュウジは咄嗟ストップピングで足元に落とした。

「出来るようになったじゃないか。ついおとといまで胸で跳ね返してただけだったのに」

「ヒロト もう良いのか？」

走って来るヒロトを見てリュウジは小さく微笑む。

「ああ。今日はディフェンスからやろう」

当時ヒロトは既にキャプテンを任されていたにもかかわらず、チーム練習の合間に抜け出して来てはパスやドリブルの相手になってくれていた。

そんな面倒見の良いヒロトは当然のように人気があり、チームのメンバー達は落ちこぼれである俺に構う事を面白く思うはずも無

かった。

「いつも思っけど、俺の練習なんかにつき合ってて良いのか？ みんなお前と練習したいのに」

突きささる嫉妬の眼差しにリュウジは居心地悪げにヒロトに訊ねる。

だが当のヒロトは気にする様子は全くなく、常に涼しい顔をしている。

「良いんだ。一応君だって俺のチームのメンバーだろ？ 早く試合に加われるように管理するのもキャプテンである俺の仕事だ」

「いや、俺が居心地悪いんだけど」

「じゃあやめるか？」

「いやっ、そう言う訳じゃない。もちろんやるよ！」

「よし！ それじゃやろうか！」

そう言ってヒロトは俺の頭をガシガシと撫でた。

ヒロトに構われてるせいで他のメンバー達に冷たく当たられる事も多かったが、満更でもなかった。何せ “みんなのキャプテン” を独占しているのだから。

自分と同じ十歳そこそこのはずなのにそう言う細かい気遣いが出るところがヒロトをキャプテンたらしめているのだろう。

俺も純粹に彼を尊敬していた。

「おい、リュウジ！」

呼ばれてハツとするとヒロトはいつの間にか20m程離れた場所に居り、「来いよ」とジェスチャーでリュウジを煽った。

「行くぞ！」

リュウジも手を振って応えたとドリブルで走り始めた。

今日こそヒロトを抜いてやるんだ！

この頃はまだ、無邪気にサッカーを楽しんでいた。

ある日の練習後、俺は剣崎に呼び止められた。

「リュウジ君。ちょっと良いかな？」

「何でしょうか」

呼ばれるまま剣崎の所に行くと、彼は血色の悪い顔に薄く笑みを張りつけたままりユウジをねぶるようにつめた。

（何だつて言うんだ？ いつも気持ち悪いけど、今日はいつにも増して気持ち悪いな）

まるで値踏みするかのような眼差しにリユウジは不快さを露わにする。

剣崎はリユウジ達がサッカーを始めたあたりからお日様園に姿を現すようになり、良く白衣姿の職員達とサッカーの練習を観察していた。

剣崎はエイリア石の第一被験者を見極めるためにお日様園を訪れていたのだが、この時はまだ子供達の誰もジェネシス計画の事は知らず、サッカーもレクリエーションの一環だと思っていたので、リユウジや他の子供達にとって剣崎はただの気持ち悪い人と言う認識しかなかった。

「まあそんな顔をするな。今日は君がもっとサッカーが上手になれる方法を教えに来たんだ。君達のお父様に頼まれていてね」

「お父様に？」

「そうだよ。私達は君達がもっとサッカーを上手になって楽しめるように協力してくれて言われているんだ。リユウジ君はいつもチーム練習じゃなくて一人だよな」

剣崎の言葉に思わず俯く。

スピードもパワーも足りないリユウジはチームのバランスブレイカーとみなされ、試合に参加させてもらえない事はまず無かった。

実際は監督やキャプテンであるヒロトがメンバー達にチームで学ぶ事の大切さを説いていたが、彼らが庇えば庇う程リユウジはチームで孤立していき、物理的にも難しくなっていた。

「みんなとサッカー、したいだろう。でも君には力が無い」

「」

力が無い。ハッキリと言われてリユウジは悔しげに唇を噛んだ。

そんなリュウジに剣崎は「だけど」と言葉を続ける。

「そう、今の君は確かに力が無い。でも、すぐに出来るだけの力がつく方法があるって言ったら、君はどうする？」

その言葉に弾かれるように顔を上げてリュウジは剣崎を見上げる。

「サッカー、上手になれるの？」

「ああ、なれるよ。おじ　お兄さんの言う事を聞けば、ね」

「やるよっ！　何でもやります！　だから教えてください！　俺、サッカー上手になりたいんだ！」

詳細も聞かぬままリュウジは剣崎に縋りついていていた。

「何でも？」

聞き返され、強調するように何度も頷いた。

「サッカー、上手になって　ヒロトと一緒にサッカーがしたいんだ！」

「そうか。じゃあ付いておいで。君を強くしてあげよう　もしかしたらヒロト君よりも強くなれるかもしれないよ」

「ヒロトよりも」

その言葉に胸が激しく高鳴るのを感じながら、俺は剣崎が差し出す誘いの手を迷わず掴んだ。

「リュウジ　？」

また練習でもしようとしてリュウジを探していたヒロトは剣崎と共に黒塗りのワゴンに乗り込むリュウジを見かける。

（どこへ行くのだろう？）

声を掛けようとしたがあつと言う間に車は走り去ってしまった。
言い知れぬ不安を抱いたヒロトを残して　。

最初はヒロトと一緒にサッカーが出来るだけの力が欲しい。ただそれだけだった。

だけどその強大なエイリアスの力に触れてその効果を実感すると、

それ以上の欲求が沸きあがって来るのを感じた。

誰よりも弱かったが故にエイリア石がもたらす確かな力と剣崎が語るジェネシス計画のハイソルジャーの魅力に抗う事無く取り憑かれていった。

（強くなれる！）

その事実が嬉しくてたまらなかった。剣崎の手を取ったのは正しかったのだ。

本当はずっと悔しかった。ヒロトよりも、自分を馬鹿にした誰よりも強くなりたい。

そして大きな力を与えてくれたお父様に報いたい。

その気持ちには石の力が多大に影響していたのだが、何も知らない俺は力への欲求は自分の意思だと信じて疑わず、ほの暗い感情に駆られるように自分の強化に励んだ。

それから後のジェミニストームとなる前身のチームを任される頃には、最初に何故強くなりたいと思ったのかなんて忘却の彼方に消え去っていた。

どのぐらいの時間が経っただろう。

研崎に誘われてから季節がいくつか変わり、俺は再びヒロトに逢った。ヒロトはマスターランクの『グラン』として、俺はジェミニストームのキャプテン『レーゼ』として。

「今日からお前達はジェミニストームと戦ってもらおう」

研崎に紹介されて前に進み出ると、一見無表情なグランの眼が一瞬見開かれるのを俺は見逃さなかった。

「『ジェミニストーム』のキャプテン『レーゼ』だ。よろしく頼む」

「何だこのガキ」

「ジェミニ ストーム ？」

戸惑いを見せるバーンとガゼルの横でグランは何も言わずただ陰しい表情で俺を睨んでいた。

（ふふふ、これから俺がもうヒロトに構われて喜んでいたか弱いリ
ユウジじゃない。

石の力さえあれば俺は誰にも負けない。グラン、あなたにも
これからそれをたっぷり教えてあげるよ。だから楽しみにしててね
）

選ばれし者よ(1)―バーン・ガゼル―(前書き)

お父様に愛されたい。その気持ちの強さに違いは無かった。
ただ、立場が違っただけ。

選ばれし者よ（１）——バーン・ガゼル——

エイリア学園におけるマスターランクとそれ以外の子供達の違いは、能力の高さの他に石の力の定着具合も重要だった。

基本的にエイリア石は常に身につけていないと効果が無いのだが、子供達の中には一定時間身に付ければ石を外した後も効果が長時間持続する体質の者もいる事が様々な実験の結果で明らかになった。

その特殊体質を持つのが主にマスターランクの子供達だった。

ファーストランク以下の子供達はエイリア石を付けたままの強化訓練だったが、マスターランクの適性が認められた子供達の場合はエイリア石は最小限の状態でファーストランク以上の過酷な強化訓練が課せられていた。

石との相性の良い彼等の身体は平均の数分の一の使用でファーストランクの数倍の耐久性を身につける事が出来たからだ。

だがマスターランクの中でも高難易度の訓練においては脱落者が続出し、最初70人近くいた子供達はたった数カ月間の短期間でグラ・バーン・ガゼルの三人だけとなっていた。

『今日の訓練は終了です』

男とも女ともつかない独特な声をしたアナウンスが淡々と拷問のような訓練の終了を告げ、三人は訓練器具から床の上に投げ出される。

「はあ はあ はあ」

誰もが疲労困憊の中グランは真っ先に立ち上がると、バーンとガゼルには見向きもせず一人訓練室を去って行く。

二人も特にグランへ声を掛ける事は無い。もちろん残されたバーンとガゼルも互いに声を掛け合う事も無い。

三人は同じマスターランクではあったが、同時に蹴落としあうラ

イバルであり敵なので仲間意識は皆無だった。

そしていつもはバーンがガゼルを残して去って行くのだが、その日は少し違った。

バーンはグランの背中を忌々しく見送りながら立ち上がって出て行くこうとするも、ふと歩みを止めてガゼルの方に歩み寄って行く。

ガゼルの調子がどこかおかしい事に気が付いたのだ。

「おいガゼル　ガゼル?!」

声を掛けても反応が無い。ガゼルは虚ろな瞳のままブツブツと何かを呟いている。

（何だ。ついにいつちまったのか。まあ今日の訓練は特にきつかったし、最近辛そうだったからなあ　　）

ガゼルはマスターランクとはいえ三人の中では一番能力の上昇値が低く、訓練後すぐ立ち上がれない事は前からあった。きっとここが彼の限界だったのだらう。

（ガゼルが潰れた。残るはグランだけか　必ず一番になってやる

そしてお父様に褒めてもらうんだ!）

バーンは薄く笑みを浮かべると研究員を呼ぼうとする。

「す　　」

だが呼ぶ事はなかった。意識を取り戻したらしいガゼルがバーンの足に縋りついて制止したのだ。

「呼ぶな　私は　大丈夫、だ　　」

ガゼルはそう呟くと再び意識を失った。

「　　」

バーンは少し眉を顰めてしばし考えると、黙ってガゼルを肩に担いで訓練室を後にした。

途中研究員がやって来てガゼルを気にかけていたが、何故か引き渡す気にならなかった。

何故ガゼルを助けたのか？

自分でも良く分からない。憐みだったかもしれない。同情だった

かもしれない。もしかしたら認識できないレベルで訓練を耐える同士への仲間意識が燦っていたのかもしれない。

少なくともリタイアすまいと必死に縋り付いてきたガゼルには手を差し伸べたいと思わせるだけの気迫があったのは確かだった。

オレはガゼルの彼の自室にベッドの上に横たえると、その傍らに腰を下ろして一息吐いた。

すぐにでも自室に戻りたいところだったが、自分も訓練でくたいたの上にこんな重たい荷物を運んだのだ。すぐには立ちあがる気にはならなかった。それにオレは助けてやったのだ、少しくらい休む場所を提供してもらっても文句を言われる筋合いは無いはずだ。

本当は自分も横になりたかったが、ベッドはシングルサイズなので無理に横になればガゼルと密着せざる得ない。何となく いや、凄く嫌だ。そもそも男との添い寝など考えたくも無かったし、ましてや相手はガゼル。床に横になる手もあるがそこまではしたくないしガゼルの部屋の床寝るなど屈辱の極み。ありえないにも程がある。

それにそこまでしなくとも座っているだけでも多少は安らげるので問題はない。

「うー」

夢でも見てるのだろうか？ ガゼルが呻いた。

何気なく顔を覗きこむと血の気の引いた頬は雪のように白く、額にはじつとりと汗を掻いて張り付かせていた。

呼吸も静かだが時折苦しげに頬をひきつらせたりもしている。

もしかして本当に調子が悪いのだろうか？

熱はないかと額に手を当てよう手を伸ばすが、ガゼルのうわ言に動きを止める。

「うさま。お父様、ヒロトだけじゃなくて私も見て くださ

「」

（ああ、そうだった）

こいつもオレと一緒にでお父様に褒めて欲しくて頑張ってるんだよな。

お父様が褒めてくれるのは“良い子”だけ。だから誰もが良い子になろうとして出し抜く事しか考えていないしもちろんオレも負ける気はないけど。

（そうなんだよな。オレとこいつの具体的な違いなんて仲間じゃない事くらいしかないんだったんだよな）

そう思うと急に切なくなり、空中で静止させていた手を動かして額ではなく頭を撫でてやる。慣れてないせいで少々乱暴気味になってしまったが。

それでもしばらく撫でていると苦しげだったガゼルの表情が心なしか穏やかになり、蒼白だった頬に血の気が戻って来たようだった。

その様子にホツとするも、同時に自分が実に“らしくない”行動を取っている事に気が付いて一気に顔が熱くなる。

（オ、オレは一体何をやっているんだ？ ガゼル相手に　？！）

本当は部屋に運んでやるだけだったのに、介抱までして頭を撫でたりなんかして　！

そう思ったら急にガゼルが憎たらしくなり、自分の気恥ずかしさを誤魔化すように鼻をつまんでやった。

「ふがっ　！　な、何をする！」

驚いて飛び起きるガゼル。そして傍らにバーンが居る事に気が付いて警戒を露わにする。

どうやら寝ていた間の記憶は無いらしい。その事に少し安堵しつつ、表情には出さずつつけんどんに言い放つ。

「ふん、暢気に寝こけてんじゃーよ。おかげでオレはお前を部屋まで運んでやるはめになったんだぞ。その上ベッドにも寝かせてやった。もう用は無い。帰るぞ！」

ガゼルは何か物言いたげだったが、それ以上の会話の余地を与えず部屋を出た。

部屋を出るまでずっと背中にガゼルの視線を感じていたが振り返る気は無かった。

扉が二人を遮ったところでバーンは不意に振り返って部屋を見詰める。

（ ）

この妙に胸が締め付けられる感覚は何だろう？

思わず胸に手を当てるも、それ以上追求するのを止める。

何となく、考えたくなかった。

（寝よう。今日は疲れた ）

妙な感傷を振り払うように足早にバーンは自室へと向かった。

選ばれし者よ(2)―バーン・ガゼル―(前書き)

バーンなんか 大嫌いだ。

選ばれし者よ（２）―バーン・ガゼル―

部屋から出て行くバーンを、私はただ見送る事しか出来なかった。

意識を失った私を通報せず部屋まで運んでくれた事に対して何か一言でも言ってやりたかったが、バーンの背中には「話しかけるな」と主張していた。

さつさと訓練室を退室してしまうグランやバーンは知らないと思うが、今回のように訓練後意識を失うのは既にもう二回繰り返している。あの時もし通報されていたら、私の評価はまた大きく下がっていただろう。

折角マスターランクに抜擢されてここまで頑張ってきたのに、それだけは勘弁したかった。

もしお父様に幻滅されるような事があつたら、私はもう生きていけない。

恐ろしさのあまり身体が震えて来るのを感じ、思わず毛布を胸元に引き寄せた。

しかしバーンに助けられるとは 何たる失態。 こんな情けない部分、見られなくなかった。

（バーンだけには負けたくないのに ！）

自己嫌悪しつつ膝に顔を埋めると、初めてバーンと顔を合わせた時の事を思い出した。

バーンと私が初めて顔を合わせたのはジェネシス計画が動き始めてからの事だった。

それまでは同じお日様園の系列施設で別々に過ごしており、互いに存在すら知らなかったのだが、カリキュラムに合わせて能力年代クラス別に振り分けられて施設を移された時。その中にバーンは居た。もちろんグランも。

だけど特に仲良く遊んだ記憶はない。しばらくは普通に暮らして

いたけどバーンとは最初から性格が合わずに喧嘩ばかりしていたからだ。

それから間もなく訓練が始まって、バーンは鼻持ちならない奴から負けられないライバルになった。

しかし今のところ能力では僅差で彼に勝つ事が出来てはいないのが腹立たしい。悔しいが奴のセンスはグランに次いで抜きん出ている。

いつそグランくらい差があると負けん気は起きてもム力つく事はないのだが。

（本当に 何で助けてくれたんだろう ？）

解らない。 あいつも私の事が嫌いなはずなのに。

しかも何故頭を撫でた ？

おもむろに撫でられた部分に触れてみる。不器用でいて優しい感触がまだ残っているような気がして瞼が熱くなる。

——ちよつとだけ、嬉しかったかもしれない。お父様に撫でられたみ_み。

（ つ！ ）

ふと胸の内によぎった思考を打ち消すように慌ててかぶりを振った。

私は一体今何を考えた？ バーンに頭を撫でられて嬉しかったのだと？

そんな訳がない。良い歳してお父様以外の人間に頭を撫でられて喜ぶなんて！ じゃなくて相手はバーンだぞ。気持ち悪い！

バーンに助けられただけでも癪なのに、撫でられて喜ぶなんてありえない！

（むしろ勝手に私に触れるなんて、バーンのくせに生意気だ。し、しつかりシャワーで消毒しないと！）

ベッドから降りて服を脱ぎ捨てながらバスルームに向かう。

そしてバスルームの扉に手を掛けたところでふと足を止めて思った。

（でも 助けてもらったのは本当の事だから、次に会った時はお礼くらいは言わないとな。 礼儀だから。 そう礼儀だから！）
とここで脱ぎ散らかしたまま風呂場に入るのは気分が悪いと感じ、全裸のまま来た道に戻って服を拾い集め始めた。

「ここでの特訓はしばらく休みだ」

朝いつものように訓練室にやってきた三人に研崎はそう告げた。

「そうですか。では、何を？」

「今日からお前達はジェミニストームと戦ってもらおう」
研崎に促されて一人の少年が進み出る。

「『ジェミニストーム』のキャプテン『レーゼ』だ。 よろしく頼む」

「何だこのガキ」

「ジェミニ ストーム ？ 君は、前セカンドランクの中にいた子だな？ 何故こんなところに居る」

そう言っただけ訝そうに眉を顰めるガゼル。 しかしレーゼは動じる事無く不敵な笑みを湛えている。

「今研崎さんから聞いただろう。 今日から私がお前達の相手だ」

「———という事なんだ？」

バーンが研崎に説明を求めると、剣崎は何も言わず顎をしゃくる。

それを合図にレーゼが足元に転がっていたボールを蹴り出して強烈なシュートをバーンに打ち込んだ。

咄嗟の事もあり受け止めきれずバーンは思いつき吹き飛ばされると、壁に強かに身体を打ちつけた。

「バーン！ 何をするんだレーゼ！」

「こう言う事だ。 エイリア石で鍛えられた私に今のお前達は勝てない。 マスターランクと言えど石を使わなければ常人に過ぎないからな」

「何だと?!」

レーゼにあおられていきり立つバーン。立ち上がろうとするが、ボールの衝撃がまだ残っているのかすぐに膝を着いてしまう。

（あのバーンが立ち上がれなくなるほどのシュートを あいつ、本当に強い セカンドランクは私達より弱いのではなかったのか？！）

バーンの背中を見せ続けられてる者として彼の醜態は少なからずショックだった。

「これからの訓練はジェミニストームとの対戦が主となる。お前達はそのチームのキャプテンだ。メンバーは他のマスターランクから好きに選抜しろ。それとガゼル」

「な、何でしょうか」

呼ばれるまま研崎の元に行くと、研崎はそつとガゼルに囁いた。

「総帥からの伝言だ。『君には期待しています。頑張つて下さい、私の息子として』と仰っていた」

「！！ お父様が、私に？！」

「そつだ。お前は選ばれた子なのだ。だから総帥の期待を裏切る真似ははするなよ」

そう言つて研崎はガゼルの肩を叩くと「一先ず解散。三人は直ぐチーム編成に掛かるように」と皆に言い渡して訓練室を出て行った。

（お父様が、私に期待を でも何故私だけに伝言を ）

その言葉を純粹に喜ぶべきか、それとも最近不甲斐ない自分に対する最終通告か。

多分後者の意味だろう。そう分かれると否が応にも身体が震えてくるのを感じる。

（見捨てられたくない。私はお父様の息子なのだ。選ばれた子供

私は 私は ）

「おいガゼル！」

立ち尽くしているとバーンに呼ばれて我に返る。

「何だ」

「グランはもう行っちゃったぞ。お前もさっさと準備した方が良いんじゃないか？」

「あ、ああ そうだな」

「お前、顔が真っ青だぞ。研崎に何言われたんだ？」

バーンが怪訝そうに顔を覗き込んでくる。

「っ！ お前には関係ない！」

そう言っただけでバーンを振り切って部屋を出て行こうとする。

だが戸口のところで来てふと思い出す。

（そう言えば、昨日のお礼）

「バーン」

「ん、何だよ？」

「その、昨日は ありがとう、助かった」

「お、おお。そうか てかなんだよ急に。お前らしくねえな」

「助けてもらったのは事実だからな。礼儀だ。だけど、お前には負けないからな！」

そう言っただけで睨みつけると、バーンは少し戸惑い気味に「そうか」と応えた。

ガゼルは再び前を向くと足早に部屋を出て行った。

部屋を出て行くガゼルを見送り、バーンは何故か寂しくなった。

何故そんな気持ちになったのかは分からない。

（さっきの眼）

研崎に何を囁かれたかは知らないが、それが大いに影響しているのだろう。

今までの対抗心に満ちた人を小馬鹿にしたようなようなものとは違う、もっと攻撃的な敵意に満ちた眼差しだった。

別に仲良くする気も無いが、自分はガゼルを心のどこかでは競い合う仲間同士のように思っていたのかもしれない。

それを全て否定されたかのような気がして少し悲しかったのだ。

その事に気が付いて思わず苦笑する。

（まあ良しさ。オレは今まで通り自分の事をやるだけだ。次は助けねえから覚悟しておけよ、ガゼル　）

しめっばい感情を頭の隅に押しやると、バーンも部屋を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3760o/>

エイリアの子供達（仮）

2011年5月16日23時27分発行